桐が谷通信

CHUBU GAKUIN UNIVERSITY
CHUBU GAKUIN COLLEGE

第７１号　　２０２５年６月１０日

発行　中部学院大学　中部学院大学短期大学部　宗教委員会　〒501-3993　岐阜県関市桐ヶ丘二丁目１番地　TEL（0575）24－2211

信仰心についての一科学者の思い

本　島　　修（中部学院大学 学長）

ヨーロッパの南仏・プロバンス地方に2010年から2015年までの5年間を国際核融合実験炉計画ITERの機構長として家内とともに赴任して過ごしたことは、私達の人生にとって大きな経験となりました。

私のライフワークは46億年前に誕生し、後50億年は寿命があるとされている太陽の中でほとんど変化することなく安定・安全に起こっている核融合反応（原子力とは違うため、以下、フュージョンと呼びます）を地上に人類が安全に使える形で実現しようという研究です。ITER計画は、その実証を目指した実験プロジェクトであり、ホスト国のフランス・EU、日本、アメリカ、ロシア、中国、インド、韓国の7極、33か国からなる国際プロジェクトです。スイス・ジュネーブにはLHCというEU設立のCERN研究所が建設した超大型の加速器プロジェクトがありますが、国際共同研究に門戸を開いており、平和に寄与するということを第一の目的として発足し成果を上げています。ITERも同じ考え方に基づいてEUがフランスに誘致をした経緯にあります。日本は青森県六ケ所村を候補地としてサイト交渉に臨みましたが、あと一歩で及ばず、準ホスト国としてこの計画に貢献をしています。

太陽が古くから信仰の対象であったことはよく知られていることです。なぜエネルギーを出し続けるのかは長い間人類の謎のロマンでしたが、量子力学の発展からベーテという学者がフュージョン反応であるという説を出して謎が解けました。この科学者は1967年にノーベル賞を貰っています。京大の学生の頃、講演に来られて、勇敢にも「若い時からノーベル賞を取る自信がありましたか？」と質問したのですが、ニコッと笑われた答えは「頑張ればできますよ！」でした。今思うととんでもない質問をしたものです。岐阜県の神岡にあるカミオカンデという日本独自の大型の観測装置で二人のノーベル賞学者が出ていますが、この研究は、超新星爆発や太陽からフュージョン反応の際に出るニュートリノというほとんど物質と反応をしない素粒子(原子、電子など最小の粒子の単位、紀元前5～4世紀のギリシャ時代のデモクリトスの原子論は有名)に関する研究です。今でも太陽からのフュージョン反応によるニュートリノは、私たちの体を1平方センチメートル当たり毎秒88億個も突き抜けています。放射線の一種とも言えますが、ほとんど反応を起こさないため無害なわけです。そして、宇宙の観測可能な素粒子の数は、約10の80剰個と言われています。数字で書くと案外小さいと思われるかもしれませんが、これらのことはだれが決めたのでしょう。私にもわかりません。演繹的な物理法則で決まったのではないようです。

フランスは、敬虔なカソリックの国です。パリのセーヌ川にはさまれたシテ島にあるノートルダム寺院に代表されるとおり、各地にノートルダム寺院がありマリア信仰に篤い国です。郊外に出ると日本の道祖神のようにあちこちにマリア像が祭ってあります。このマリア信仰がイギリスにわたり、清教徒に影響をして女王信仰になったという歴史学者もいます。1336年からのジャンヌダルクの逸話で有名なフランスとイギリスの間の100年戦争などもきっと影響を与えているので

しょう。

クリスマスイブに私たちが住んでいたアクサンプロバンスの教会に立ち寄ったときのこと、多くの信徒が祈りをささげるその厳粛な雰囲気に深い感銘を覚えたことを今でも鮮明に覚えています。ただ、フランスではフランス革命以降セパレーションと言って政教分離の厳格な考え方があります。ローマ法王をITERに呼んでミサをしていただこうとしたのですが、この考え方から、反対も出て結局実現しませんでした。ユダヤ教徒の有力科学者をバチカンに派遣したりしてあと一歩のところまで行ったのですが。

科学者と信仰ということは一見矛盾しているようですが、それは間違いと思います。私もそうですが科学者にも敬虔な信仰心を持っている人が多くいます。19世紀の初めにニュートンの古典力学以来の新発見である量子力学が勃興した際に、成功した科学者の一人がドイツ人のハイゼンベルグです。この方は、不確定性原理という基本原理を提唱しました。ある素粒子を光とかの何らかの計測手段で観測しようとすると、一定の確立で場所が動き所在があいまいになるという理論で、まあ言わば霧に囲まれた状態の様になると言えますが、簡単に言えば確定論的でなくなるという原理です。まさしく雲をつかむような世界を表します。この原理が出た時に当時の哲学者は人間の自由意思を説明できるかもしれないと色めき立ったそうです。

産業革命が起こってから100年余りの時ですから急速な発達を遂げつつあった科学と信仰の無矛盾性が問われかねない時代だったのかもしれません。実際、有名なアインシュタインは、その後ナチの迫害を逃れてヨーロッパからアメリカへ亡命していましたが、第二次大戦のさなかに、米国ルーズベルト大統領にドイツにはハイゼンベルグがいるから間違いなく原爆を作る、ナチスドイツが作るより先に作るべきと進言をして、それが、ナチスドイツではなく日本の広島、長崎に使われたという悲惨な事実があります。しかし、バイエルン生まれでおそらくカソリック信仰に篤かったハイゼンベルグは科学者としての良心からナチスドイツへの協力には消極的だったとされています。

私は実験科学者ですから、演繹手法ではなく帰納法によって真理に到達しようとしてきました。皆さんご存じの通り、未来予測で唯一成功しているのが天気予報なのですが、膨大な過去のデータとスーパーコンピュータを使って帰納法に基づいて未来予測をします。私もこの手法に多くを頼ってきました。確信しているわけではありませんが、経典、歴史、奇跡の積み重ねなどが豊富にあるキリスト教、仏教などは帰納的に深化してきたのではと思うようになりました。実績のない演繹手法に偏りがちな新興宗教、原理主義宗教とは全く違うように思います。こういう議論は信仰心とは違うかもしれませんし、あまり深追いをすべきではないでしょうから機会のある時に専門の方の教えていただきたいと思います。

フランスでは宗教に関する議論は双方が避けることもあり、一切いたしませんでした。むしろ態度で表したと言っていいのかもしれません。今思うと、それはまさしく文化とナショナリティーの違う者どうしの最大のコミュニケーション方法だったのだと言えるでしょう。

科学が宗教にすり寄ってくる時代になったとある神学者の方に聞いたことがあります。はたしてそうなのか、逆なのかは実感として私にはよくわかりません。おまけに、現代ではそこに政治が入ってきますから、なおさら複雑になるわけです。逆三角形の関係といえるかもしれません。さてどうなのか？私にとってはこれからの人生の最大の課題の一つになると思います。

関市と各務原市に立地する中部学院大学は、素晴らしい自然環境に恵まれ、我が国を支えるいくつもの産業をもつ地域に密着し、そこに住み働く方々から愛されている歴史のある大学です。そして、学生の皆さんの人生の入り口を提供する場でもあります。中部学院大学は「神を畏れることは知識のはじめである」という素晴らしい旧約聖書の言葉を建学の精神にしています。私といたしましては、この「知識のはじめ」という教示と強いかかわりを持ちながら大学の発展に貢献させていただきたいと考えています。

L.E.A.P. Plazaにおける聖書の学び

浅田　訓永（国際交流・留学生センター所長）

“先生、わたし、4月から国際交流・留学生センターへ異動になりました。よろしくお願いします！”これは、今年度から同センターのメンバーとなった主任より、かけられたひとことである。わたしも10年前、彼女と同じことを当時の同センター所長（片桐学長）に伝えたことを思い出した。

国際交流・留学生センターとわたしの最初のかかわりは、2015年にオープンした各務原キャンパ

スの国際交流拠点 L.E.A.P. Plaza（関キャンパスは 2013 年オープン）での活動であった。※ そのきっかけを与えていただいた当時の短大学長（片桐学院長）からは、「メルトン・フィリップ・ナタナエルという明るくておもしろい牧師の先生が、金曜日に英語の授業で出講されているから会ってみるといいわよ」といわれた。以来、メルトン牧師は、L.E.A.P.活動になくてはならない存在となった。

各務原 L.E.A.P.では、金曜日の昼休み、箴言 14 章 29 節, 15 章 18 節, 29 章 11 節, エフェソの信徒への手紙 4 章 26, 29, 31 節などについて、お話いただいた。最初は、片桐学院長、L.E.A.P. 担当職員及びわたしの 3 人でスタートしたが、すぐに片桐学長も参加された。メルトン牧師の楽しく話される英語と日本語が廊下にも聞こえ、次第に教育学部の日本人学生、当時の経営学部の留学生も参加するようになった。聖書を通じて、日本人学生と留学生の交流が実現したのである。

メルトン牧師の問いかけは、「ひとはなぜ怒るのか？」であった。それは、自分が「怒」の感情を「選択」するから「怒る」のである。「怒」の感情を「選択」しなければ、「怒る」ことはない。聖書の上記ポイントはここにあった。なるほど！確かに！とみんな思ったが、それが実践できているかと聞かれると…（ちなみに、箴言は生きていくうえで重要なことが述べられているとのこと）。その後、メルトン牧師の授業が関キャンパスに移り、同時にわたし自身も関 L.E.A.P.活動にかかわることになった。ここでは、イースターやクリスマスの折、それぞれの意味を聖書から紐解き、メルトン流のイースターイベントやクリスマスパーティを開催していただいた。

本学に在籍する留学生は（今年度の秋入学予定者も含めると）優に 300 名を超えるが、日本人学生との交流という点では、まだ充分ではないと感じている。実際、彼ら・彼女らからは、留学生と交流したいけどきっかけがつかめない（特に各務原）、日本文化を体験したいなど、様々な声がわたしのもとに寄せられる。こうしたニーズに応えられるよう、国際交流・留学生センターとしても、両キャンパスのグローバル化に貢献していきたい（将来的には、学生も主体的にかかわるのが望ましい）。国籍、宗教、文化、考え方などの異なる相手と向かい合い、世界の多様性を実感し、認め合う。L.E.A.P. Plaza が、そのような出会いと成長の場になってほしいと願っている（関連して、レビ記 19 章 33～34 節、ヘブライ人への手紙 13 章 2 節などを参照）。

このように、わたしにとっての L.E.A.P.活動は、トライ＆エラーの連続であった。そんなとき、メルトン牧師は、聖書の次の一節を教えてくれた（コヘレトの言葉 9 章 10 節）。

「何によらず手をつけたことは熱心にするがよい。いつかは行かなければならないあの陰府には仕事も企ても、知恵も知識も、もうないのだ。」

冒頭で紹介した彼女は、日々の新しい業務にひたむきに取り組んでいる。彼女の真摯な職務態度は、わたしの心に響き、この一節を思い出させてくれた。

※L.E.A.P. Plaza は「自主的な学びの空間が、皆さんにとって飛躍の場となるように」名付けられ、「L.E.A.P. は、それぞれ『Language』『Education』『Active』『Progress』の頭文字からも成り立っている」（片桐史恵「仲間と共に創造する学びの空間～L.E.A.P. Plaza 誕生～」中部学院大学報 30 号〔2013 年〕7 頁）。

聖書における外国人

高木　総平（岐阜済美学院宗教総主事・中部学院大学宗教主事）

この紙面で案内をしています今回の宗教講演会には、桜美林学園大学の国際交流で仕事をしている伊賀野千里先生を講師にお願いしていますので、このような題で、少し述べることにします。一言で言いますと、旧約聖書から新約聖書へと続く流れは、ユダヤ人から外国人へという方向があるということが基本であるということです。外国人というより、異教徒という意味を込めて、異邦人と言われています。

まずレビ記 19 章 33-34 節から示しましょう。「寄留者があなたの土地に住んでいるなら、彼を虐げてはならない。あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれたもの同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。」このような根本精神がありながらも、その後、ユダヤ人は周りの大国に圧迫され、支配され続けてきたので、新約聖書の時代の社会では、外国人と交際してはいけないというルールもあり、今でいう外国人への差別、偏見はひどいものがありました。しかし聖書は明確にそれを克服する視点をもっています。例えばこのような聖句です。「あなた方はもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり」（エフェソ：19）このような言葉以前に、イエス誕生時のこととして、マタイの 1 章にイエスの系図が記されています。驚くことに、この中に異邦の女性ルツがいます。そしてクリスマスの物語において、とても有名な生まれたばかりのイエスに最初にまみえたのが東

方の、外国の学者たちでありました。イエス誕生時から、ユダヤから外国への方向が明確に記されています。

また有名なよいサマリア人の話は、ユダヤ人が、異邦人以上に差別と蔑視の目を向けていたのが隣国のサマリア人でした。その一サマリア人が、ユダヤの宗教的な指導者たちができなかった強盗の被害に遭って重傷を負った人を助けるという物語があります。そのサマリア人のルーツは、大国の支配によって血やその宗教的な文化が混淆し、元のユダヤ人同胞としては、大きく違った存在になっていたのです。

このような例をあげると、聖書には多くの話が記されています。歴史的にも、そして今も、国家や民族主義が闊歩し、様々な深刻な問題を生じさせています。聖書から国家や民族って何？と問われていますし、それを越えていくあり方が示されています。

2025年度　宗教講演会
「共に生きると言うこと」
～キリスト教主義教育と海外経験から学んだこと～

桜美林大学　伊賀野　千里 先生

日　時：7月 7日（月）　11：10 ～12：20
（第 2 時限の講義は行いません。）

会　場：関キャンパス　11301 講義室

みなさんが大学へ入学された時、どのような目的や希望を持っていらしたでしょうか。またその目的や希望は、どのような背景や出来事から生まれたのでしょうか。

私たちの人生には、思いがけない出会いや出来事によって、将来の方向性が導かれることがあります。

私はこれまでの人生の約３分の１を海外で過ごしてきました。長期で滞在した国は４カ国になりますが、その内３カ国が、開発途上国と呼ばれる国々です。時には、スラムと呼ばれる、その地域でも特に貧しく厳しい環境の中で暮らすこともありました。医療、教育等の基本的な機会が奪われ、差別や偏見といった様々な問題と直面しながら生きる人々と共に過ごしてきましたが、生活がどんなに苦しくとも、同じ地域に暮らす人を敬い、支え合う姿は、常に他者を思いやる気持ちに溢れ、私自身の生き方や価値観にも大きな影響を与えました。

現在、私は日本で大学教員として勤めながら、日本国内で様々な理由で生活に困窮されておられる方々、支援が必要な方々と関わりを持たせてもらっています。昔、開発途上国で出会った方々との出会いや経験をきっかけに「人と支え合うつながりの中で生きていきたい」「だれも排除されない社会を目指したい」という思いを抱くようになり、それが今の支援活動の原点となっています。貧困や格差、差別といった構造的暴力をなくし、人々の尊厳が守られ、平和で安心できる社会はどうすればつくることができるのか、中部学院大学の学生のみなさんと共に考えたいと思っています。

◆プロフィール

伊賀野　千里

桜美林大学グローバル・コミュニケーション学群　特任講師

大学卒業後フィリピンに渡り、現地の大学で日本語講師として従事。その後、青年海外協力隊（ドミニカ共和国、村落開発普及員）を経て、米国ニューヨークで民間企業在職中に日本財団 Asia Leaders Program 奨学生に選ばれる。アテネオ・デ・マニラ大学（フィリピン）、国連平和大学（コスタリカ）にて平和構築について学び、2011 年平和教育修士号を取得後、独立行政法人国際協力機構にて開発教育支援事業に携わる。2017 年に桜美林大学リベラルアーツ学群助手（国際協力専攻）に就任し、2020 年より現職。